シンポジウム講演録

オーストラリア　ツーリズムシンポジウム

――新時代におけるオーストラリアの観光を考える――

開会のご挨拶

重　松　伸　司

寒い中を多数ご参加いただきまして，ありがとうございます。オーストラリア・アジア研究所所長の重松伸司です。昨年度に「オーストラリア研究所」を改組・改編しまして，新たに「オーストラリア・アジア研究所」として発足しましたが，本年 2017 年度は 3 年目を迎えることになります。

初年度の重点活動としましては，ASEAN，海のアジア，比較公共政策の 3 つをテーマにしました大型シンポジウムと，オーストラリア・アジアのビジネスをテーマとする社会人講座，そしてマレーシアの研究者との共同研究セミナーを実施してまいりました。

2016 年度は研究紀要の充実を目的としまして，学内・学外から研究論文を募ることと学外の民間・学術諸団体とのコラボを重点目標にしてまいりました。

本日のシンポジウムは，本年度の掉尾を飾る「新時代におけるオーストラリアの観光を考える」というテーマで行うことになりました。新たな潮流となりつつある「ツーリズム」について，和歌山大学の加藤久美先生の基調講演を始め，4 人のシンポジストの方々から，様々な角度・視点から議論をいただくという趣旨になっております。

本日のメインテーマである「ツーリズム」とは，人の行動様式の一つですが，日本語としての用語，概念，内容を見直すと実に多様です。

「旅，観光，遊山，探検，遠征，布教，見学，お参り，修行，移住，避難，疎開」など日本語にも数十語出てきます。

私の専門研究は「人間の国際移動」です。特にアジア系移民，インド系を中心に中国系，日本人系の移民の動態と社会文化の変容に対する研究関心から，これまでインド，東南アジア，オーストラリアなどで多文化主義のフィールドワークを行ってきました。これもツーリズムの一つの範囲に入るのかどうか，ご議論いただければありがたいと思います。

ツーリズムの動態や意味を考えつつ国内，海外を見ますと，結構，多様かつ多義的で，歴史的にもさまざまな目的や内容があります。

例えば，西国八十八カ所のお遍路，お伊勢参りは，江戸時代以前からあります。スペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼，インドの行者が巡る諸国遍歴，イエズス会士による宗教伝道の旅。求道の旅など，宗教的，癒しの旅もあります。

また，西洋では，王位に就く者が自分の領国を馬車で回る旅，日本語では「巡幸」といいますが，英語では進歩，発展を意味する「progress」と同意です。これは，帝王儀礼の旅です。

ドイツでは，腕を磨くための修行職人の「ヴァルツ」の旅があります。日本にも「包丁一本　晒にまいて　旅へ出るのも　板場の修業」という旅もあります。

さらに，芭蕉や種田山頭火の俳句修行の旅。中国では，各地の諸侯に人の道を説く，「孔子の諸国行脚」があります。その他に，寅さんのテキ屋稼業兼出会いを求めてのフウテンの旅もあります。あるいは，何も求めず，何も意図せず，そして何の目的も定めない漂泊の旅」もあります。旅は，さまざまにあるということです。

旅の特徴の一つには，旅を人生と同義に置くことでしょう。西欧では，神の意志に近づく道のりとする考えもあります。インドでは，旅は神の摂理を自ら体得する悟達への過程とみなされているようです。それぞれの国，民族，地域により，さまざまな旅のありようがあります。旅の特徴は，必ずしも一方通行の営為だけではなく，

日常から非日常へ，非日常から日常へと一種のサイクリックな循環の営為だとも考えられます。

もう一つの特徴は，広義の旅で，ツーリズム，ジャーニー，トリップなど用語はともかく，旅をする主体は「私」で，旅の客体は旅をする場，環境，時間です。旅の中で達する思想，あるいは旅の中での心象変化に意義がある。旅は立体であり，多元的，多次元的，多面的であると考えているのですが，議論いただければと思います。

ところが，日本で一般に「ツアー」，「ツアーリズム」というと，ほぼ「観光，物見遊山」というイメージが浮かびます。恐らく，その戦後のはしりは，ご承知のように，高度経済成長のピーク期の1973年に，近畿日本ツーリストが刊行しました雑誌『るるぶ』の「観る・食べる・遊ぶ」に象徴されているのではないかと思います。戦後の復興の中で，これまで押さえられていた欲望，「どこか，遠くへ行きたい」，「知らない人に会いたい」，「美しいものを見たい」，「口にしたことのないものを，味わいたい」という，「いい日旅立ち」に始まる五感満足の旅だったのではないかと思います。

皆さん方のお宅のポストには，1日，数種類の旅の広告雑誌が入っていると思います。そして，新聞の紙面のほぼ半分は広告です。また，旅行会社の店頭では，パンフレットがあふれています。これを見ても分かりますように，今日もなお，『るるぶ』の旅は求められているのです。

しかし，今日，人々の旅を巡る状況や，旅の実態と概念，旅の思想に大きな変化が起こっていることも事実です。交通網の急速な発展や，虚実入り乱れてのバーチャルな情報の増殖，インターネット情報，巨大災害の頻発，宗教や文化の変容など，ヨーロッパやアジアの各地域で大きな変化が起こっています。21世紀に入り，「ツーリズム」そのものの動機や内容，あるいは「人は，なぜ旅をするのか」，「旅は，人々の意識に何をもたらすのか」といった課題は大きく転換しています。ゴーギャン風に言えば，「われわれは，どこから来たのか。これからどこへ行こうとするのか」と。

娯楽・観光の旅から，さらに，今日では，医療介護のサービスを求めての旅，食と伝統文化の関係を学ぶ旅，有形・無形の歴史遺産を考える旅，災害・戦禍などの遺跡見学，負の遺産の疑似体験など，生き方の模索としての新たなツーリズムも盛んになってきています。これは「旅のパラダイム転換」ではないかと私は感じ始めています。これについては，今日，基調講演の話，そしてパネリストの方々によって，さまざまな角度から論議をしていただき，質問とコメントをいただきたいと思います。

これまでの「見る・食べる・遊ぶ」という『るるぶ』から，これからは「求める・考える・学ぶ」という，新たな『るるぶ』への転換が起こりつつあるのではないかという予感がします。

今日のシンポジウムでは，オーストラリアという場を対象に，各シンポジストにより，多面的で新しいツーリズム論，新たなツーリズムのパラダイムを描いていただき，古いツーリズムの概念に何らかの突破口を見いだしていただければありがたいと思います。

以上です。ありがとうございました。

それでは，本題に入ります。今日，13時15分から14時10分前後まで，和歌山大学観光学部の副学部長兼教授である加藤久美先生に，基調講演をお願いします。よろしくお願いします。

追手門学院大学　オーストラリア・アジア研究所主催

オーストラリア ツーリズムシンポジウム

― 新時代におけるオーストラリアの観光を考える ―

日 時：2017年1月21日(土) 13時～17時（12時30分開場）
会 場：追手門学院大阪梅田サテライト セミナールーム
（阪急電鉄梅田駅直結、阪急ターミナルビル(阪急17番街) 16階）

無料
定員70名

オーストラリアは従来から観光大国として知られていますが、近年、多民族共生や先住民の文化、そして流刑地時代の歴史などを踏まえた多元的な観光開発が展開されています。
この催しは、総論としての講演とシンポジウムの2部構成です。シンポジウムでは各シンポジストたちが、それぞれの専門領域からオーストラリアの観光に切り込んだ後、全体討論を行い、新しいオーストラリアの観光のあり方について俯瞰します。

開　会　13時00分～17時00分（12時30分開場）

▶全体司会：重松　伸司
（追手門学院大学オーストラリア・アジア研究所(以下「豪亜研」) 所長


重松 伸司

第1部　講　演（総論） 13時10分～14時10分

▶講　　師：加藤　久美氏
（和歌山大学観光学部副学部長・教授、Center for Tourism Research副センター長）
東北大学、University of Queensland(PhD) 卒。専門はサステナビリティ、環境倫理。
2012年より、全村避難が続く福島県飯舘村復興支援を続ける。


加藤 久美 氏

第2部　シンポジウム 14時20分～16時55分

▶コーディネーター：加藤久美氏　▶司　会：重松伸司


井出　明


弘末 雅士


大麻　豊


高田 剛司

テーマ

- ●ダークツーリズム…… **井出　明**〈追手門学院大学経営学部 准教授、豪亜研所員〉
- ●エスノツーリズム…… **弘末　雅士**〈立教大学文学部 教授、豪亜研客員研究員〉
- ●スピリチュアルツーリズム… **大麻　豊**〈トラベル・ミトラ・ジャパン ㈱風神企画 代表取締役、豪亜研客員研究員〉
- ●フードツーリズム…… **高田　剛司**〈㈱ 地域計画建築研究所（アルパック）チーム長、豪亜研客員研究員〉

●シンポジウム終了後に懇親会を予定しています。会費3,500円を予定。参加を希望される方はシンポジウム参加申込み時にお申し込みください。（懇親会の参加希望は1月19日（木）締め切り）

お申込み方法

参加をご希望の方は、「1/21 シンポジウム」と明記して、氏名(ふりがな)・連絡先(住所および電話番号)・メールアドレス・所属・懇親会参加の有・無をご記入のうえ、下記までメールまたはFAXでお申し込みください。※先着順。定員になり次第締め切らせていただきます。(faxは裏面の申込み用紙をご利用ください。)　お申し込み受付後、受講票をメールまたはFAXにてお送りします。

お問い合せ先　**追手門学院大学オーストラリア・アジア研究所**

〒567-8502　茨木市西安威2-1-15　TEL：072-641-9667 (平日9：30～17：00)
Fax：072-643-9476　E-mail：cas@otemon.ac.jp　ホームページ：http://www.otemon.ac.jp/research/labo/csr/cas

主　催：追手門学院大学 オーストラリア・アジア研究所　　**後　援：オーストラリア大使館、大阪日豪協会**

オーストラリア　ツーリズムシンポジウム　チラシ